

## 第19回Kozoom テーマ 「老いを寿ぐ」

清水健二

高津5期生の仲間たちの多くは、今年米寿を迎えることになった。年毎に他界する者が増えてきている中、しぶとく生きている人達に「老いを寿ぐ」というテーマは、嬉しいようであり、「ぼーと生きてるんじゃないぞ！」と何処からか聞こえてくるようで複雑な気持ちである。

奈良大和路を歩いていると、古い家の入り口に米寿を祝う手形を貼ってあったり、縁起物として杓(しゃ)もじが掲げてあるのが目に付く。最近はめっきり少なくなったが、それでも旧家にはよく見られる。88歳まで長生きする人が少なかったことから、家族が長生きを寿ぎ感謝した証を表現したのだろう。



「寿ぐ」なんていう言葉を習ったのは、国民学校の4, 5年生の頃ではないかと思う。当時は「壽ぐ(ことほぐ)」と書いて、「士(サムライ)のフエは一寸(イチ インチ)」と誰かに教えられたのか覚えていないが、今でもしっかり書けるからありがたい。

その「壽ぐ」は4月29日の天長節前に、校長先生が天皇陛下の誕生日を壽ぎ、訓示を受けた時に使われたように記憶している。つまり、「言祝ぐ(ことほぐ)」と同意語で、偉い人を称え、お祝いの時に使うものだと認識していた。

「君が代」の歌も「言祝ぐ」である。古今和歌集にある、  
「君が代は 千代に八千代に さざれ石の巖となりて 苔のむすまで」と歌い続けてきたものである。

「壽ぐ」は時を経て、庶民の祝い事に使われて一般化し、長生きしている老人に対して敬意を表し、敬老の日には国は長寿や、金婚式を迎える夫婦を祝して、記念品を授ける世の中になった。最近では長寿も100歳にならないと祝ってくれなくなってきた。20年程前は100歳以上の老人は日本で1万人程度だったのが昨年2021年には8.7万人と急増している。かつて100歳近い金さん、銀さんをスターにするほどに老人の長寿を称賛した。ところが今では忘れ去られてしまい珍しくなくなってしまった。

若い人達が都会へ移り住み、田舎に親を残したままにしているし、仮に都会に住んでいても親と別居するとか、高齢の親を施設に入れ、他人に面倒をみてもらうことが普通になってきた。

100歳老人が増えると言うことは、その子供達も70～80歳になって、とても親の面倒などみられなくなり、結局他人にみてもらうという状態になってしまった。かつての親と子、孫という3代が同居した家族構成は覆えり、爺さん、婆さんは取り残され、行く場所を失いつつある。親と子のあり方も変化し、親子の絆そのものの価値感も大きく揺らいできている。

人生100年は珍しくなくなるに連れ、「50、60は涙垂れ小僧」となり、「60、70でももっと働け」と発破をかけられる世の中になった。私どもが子供の頃には、60歳の還

暦を迎えると隠居して小さい孫たちの面倒を見たり、のんびりと過ごす生活風景などはよく見られたが、そんな光景は忘却の彼方に行ってしまった。

私が社会人になって働き出した昭和30年半ばに、深沢七郎の「檜山節考」という小説を読んで感動したことがあった。その数年後、今村昌平監督の映画を観た時はもっと衝撃を受けた覚えがある。70歳になると年寄りには檜山に行かねばならない。それ以上は生きる値打ちはないとおもわれていて、主人公のおりん婆さんは、69歳に息子の辰平を急かして、息子に背負われて檜山参りをし自ら捨てられに行くという話である。孝行息子の辰平は、耐え難い思いをしながら山に登るが、姥捨ての日に雪が降ると婆さんは浄土に行けると思っていた。その通り、その日に雪に出合って逡巡していた辰平が救われたという。そんな信州の姥捨て伝説をもとに書かれたものである。

姥捨の行為は、貧困がもたらす悲劇だが、誰かが死ななければ子孫は生き残れない。その矛先が年寄りに向けられ、口減らしを正当化する残酷な伝説である。

日本の伝説をより神秘的に、不思議な世界を創生するラフカデオハーン(小泉八雲)の小説にはロマンがあるが、同じ伝説を取り上げても、この「檜山節考」は、日本の寒村で貧しさに耐えながら苦しい生活する人達を、愛惜を持ってえがいた作品だけに感銘した。

さて、100年人生を迎えたものの、我々の生活の有り様が変わり、親と子、孫との絆も希薄になり、老人は孤立と孤独に耐えて行かねばならなくなってきた。そこに追い



檜山節考の映画

打ちをかけるように、世界に感染拡大し続けるコロナ禍で、高齢者への接触を自粛するような緊急事態宣言は、まさしく病魔による現代版姥捨となっている。

貧困からくる棄老行為は現在の社会ではなくなってきたが、経済的にも豊かになってきたものの、苦勞し愛情を注いで育てた子に、親の面倒を疎まれる生活環境に変わってきた現在社会は、やがてその子も親となって、同じ辛さを味わうことになるだろう。どう考えても何処か狂ってきたのではないかと思う。経済発展至上主義による競争社会の中で生き抜く強さができても、精神的豊かさや情愛の心が喪失してしまう社会は、冷酷でトゲトゲしく生き辛いものである。

一方そんな中で、ボランティア活動が広がってきていることは救いがある。人々の間に苦樂をともにして生きていく生活があってこそ、生き甲斐も出てくると思っている。共助という気持ちが自然に湧いてくるような社会になってほしいを願うところである。

折角の100年人生といえ甘くない。覚悟を決めながら、どう生き抜いていくかという重い課題を突きつけられているよう思えてならない。

「ぼーと生きている場合でない」と思いながら、生きている限り、生き抜いて行こうと思う米寿の歳である。

(令和4年1月 記)